

島田正治

日本からの連絡で作家の水上勉さんが亡くなったことを知った。またの訃報である。行年八十五歳、病名は肺炎だった。もう十年以上も前になると思うが中国訪問中、北京でたまたま天安門事件に遭遇し、ホテルの窓からこの様子をまのあたり見てショックを受け、即帰国、入院手術、以後療養となった。肺か心臓か通常の人より何分の一しか働かなくなったという。

二十年以上になる。銀座の文藝春秋画廊で個展を開いていた折り、偶然水上さんが通りかかり作品を見てくださった。その時は、友人の正岡千年君が来ていて二階中央のソファで話していると、見ると階段を登ってきた人がなかなか熱心に絵に食い入るように見ておられ、その足の運びも他の人とちがう。わたしもその人の後姿を追った。横顔を見ると、どうも作家の水上勉さんに似ているので、横にいた正岡君に「あの人、水上さんとちがう」と言うと、正岡君は「まさか水上さんがこんなところ歩いていないでしょう。それは人違いですよ」と言った。

この方がひととおり作品を見終わった機を見て近づいていき「どうぞお休みください。水上先生でしょう」と言うと「そうです。」と答えられた。その折り、どんな話をされたか、したか、ほぼ忘れてしまった。階下へ行き、わたしの小冊子の画集、数冊あったが「これみなください」と言って一万円札を出された。

それから水上さんとの交流が始まった。本を送ってくださったり、自筆毛筆書の巻紙の長い手紙を三通ももらったりしている。美しい書だった。

そのうち、画集を作ったらどうかとすすめられた。「出版社はどこにでも話してあげます」と言ってくださった。日貿出版社から本を出してやろうと話がきて、では本の序文を水上さんに書いてもらおうということになり、わたしの『島田正治墨画集』のトップに “ 島田正治さんの世界 ” で飾ってもらった。

いつか軽井沢の別荘に招待されて一泊して帰ってきた。この折りは若い友人の春木夫妻、家内同道で計四人だった。夕方着いて、夜の九時ごろから食事、ウィスキーなども飲みながら、延々水上先生を囲んで話した。夢中になって話に聞き入り、さてどのくらいの時間になっただろうか、先生が指をさされてふり返ると、東の空が白みかけはじめていた。朝五時だった。「さあ少し寝ましょう」ということになった。この折りの水上さんの語りぐちが、また即文章になっていたのには驚かされた。

水上さんの郷里に「若狭一滴文庫」ができた。この折りも春木夫妻の車で若狭まで連れていってもらった。わたしの「グアナファート」の絵を一点収納してもらうことになり、それを見に行っただけである。まだ開館までに少し時間がかかり造園などの作業が行われていた。建物は総木造で広い空間があり、堂々とした和風のよさが生かされていた。図書館には水上さん所蔵の本がみな収められた。

水上さんの生涯は、字で書いたような波瀾万丈の一生だったと思う。苦勞のつづきだった。わたしとは十二歳年上で年のへだたりはあるが「お互いに苦勞しましたなあ」と述懐されている。晩年は「私の小説は半分フィクションをとり入れるが、これからは、いっさい、作り事は書かぬ、そういうものを書く」と何かで読んだことがある。先生のご冥福を祈る。

・・・次号につづく

本文中

『島田正治墨画集』は

「書籍」のコーナーにて紹介しております。

ご購入は「アート&民芸品」コーナーよりSH MADA'S BOOKSをクリックしてお申込みください。

Eメールにても承ります。

ご意見・ご感想はトップページ右上メールボタンよりお送りください。